

エッセイ

空はまるごとひとつなのに　　ーロダーリの詩とウクライナ危機ー

長沢美抄子

ウクライナへ“国境”を越えてロシアが侵攻した日から、いく度も何度も自分の頭の中で繰り返し聞こえてくる詩のフレーズがある。イタリアの詩人ジャンニ・ロダーリの短い詩である。

おやくそく

詩・ジャンニ・ロダーリ

毎日やっておくことがあります。

からだを洗う、まなぶ、あそぶ、

おひるには食卓を準備する。

夜にやっておくことがあります。

目をとじる、ねむる、

夢みる夢を持ち、

耳をとじる、そして静けさだけを聞く。

絶対にやってはいけないことがあります。

昼にも夜にも、

海でも陸でも、

たとえば戦争を。

(翻訳・長沢美抄子、協力・マルタ・モレット)

この詩（原題は Promemoria、備忘録の意）には、子どもに向かって語りかけるやさしさと温かさがあふれている。また同時に有無を言わせない厳しさがある。それは人類社会への愛ゆえ。

子どもと共に学ぶ大切な約束事

子どものうちに身につけるべき良い生活の基本を「忘れてはならないこと」つまり約束事として一つひとつ、ゆっくり言い聞かせるように並べていく。そのお約束を聴く者、読む者は、一つひとつ確認していく。はい、そうだね、わかりました、と。ところが、絶対にやってはいけないこともあるよと言われ、それは、なあに？と耳を傾ける。すると、まったく異次元の予想しなかったお約束が告げられる。嘘をついてはいけないよとか、駄々をこねちゃいけないよというのではなく、「戦争はしてはいけないよ、絶対にね」というのである。はい、そうだよ、戦争をするなんて、人を殺すなんてとんでもないことだからね、と、子どもは丸ごと言葉を飲み込んで自分に言い聞かせることだろう。そして繰り返すだろう。

この詩を紹介してくれたヴェネチア生まれで在日 21 年の日本研究者マルタ・モレットさんは、「小学生のときに皆が覚える詩なのです。ロダーリの詩やお話はほんとうによく読みました」と語っていた。イタリアの子どもたちは、こうした教える詩と共に成長するのだ、と感動してしまった。イタリア人が悲しみと痛みの経験から知った平和の大切さへの強い思いがこのたった数行の詩に詰め込まれている。

ジャンニ・ロダーリ（1920-1980）はイタリアの児童文学者であり国民的詩人と言われる。国際アンデルセン賞受賞者である。一昨年は生誕百年記念で、再版された本、新たに出版された本が何冊もある。

ロダーリは戦場に直接かりだされなかったが、身近な人々の死を見ているし、兄弟は強制収容所に入れられもしている。ファシズムの中で経験した苦悩もあった。第二次世界大戦中にレジスタンス運動に参加し、後にイタリア共産党にも加わった。小学校の教師から身を立て、大戦が終わってジャーナリストへ、そして文学の道に進んだ。彼の書く物語は、笑いとユーモアに満ち、わかりやすく、あたたかい。子どもたちに愛される所以だ。『チボリーノの冒険』の訳者である関口英子氏が書いている。ロダーリは「なにより、この世の中で生きていく上で、何が大切なのかということに、それとなく気づかせてくれる」のである。

ロダーリはソ連を度々訪問していたこともあり、彼の作品はソ連の子どもたちに相当浸透していたのではないかと想像するのだが、プーチンはロダーリ作品を愛読するような子どもではなかったのかもしれない。

子どもと接していると、素朴な疑問を子どもからぶつけられることがあるし、大人の自分がどう答えて良いかわからず、通り一遍のことを反射的に答えてしまうことがある。いつまで経っても大人は悩み続けるのだ。けれども、何よりも大事なことは命を守ること、戦争をしてはいけないことだと説き続けなければならないし、その言葉を大人自身も「絶対に」守らなくてはならないのだと思う。

最近のNHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」のある場面でハッとさせられたことがあった。子ども同士の喧嘩である子に怪我をさせた息子（金剛）に父北条義時は問う。「先に手を出したのはどちらだ。向こうか？向こうが押してきたのか？」「弥九郎が押してきたのです」と答える息子。「押されるようなことをしたのではないか。先に手を出したのはお前だ。そうだな。」息子はうなずいて父を見る。「なぜだ？」と問われて、下を向く息子。「言いたくなければ言わなくて良い。しかし今後は、どんなことがあっても手を出してはならぬ」と父は説教する。そこへ別の子ども（鶴丸）が訴える。「金剛は私を守ってくれたのです」と。「弥九郎が私を孤児（みなしご）とからかったのです。金剛は私の代わりに殴ってくれたのです。」それを聞いた義時は息子を見て「そうなのか？」。息子はうなずく。父はほほえみ、息子の頭を撫でる。

この一幕に私は、ああ、そうかと合点した。子どもの喧嘩ではあるが、どちらが先に手を出したのが一番重要な善悪の決め手だという教えだ。それが人間世界の掟なのだと。しかし、それには隠された理由があったと父が知るや、わかった、そういうことなら、それを美しい行いとして認めてあげようと、温かい眼差しを息子に見せる。ただし褒めはしない。理由があってもダメなものはダメなのだ。同時にまた喧嘩には深い理由があったということも示される。

ロシアが先に手を出したのだから悪いのはロシアだと改めてそうだなと痛感する。子どもの世界にある原理原則にも反する行為だった。だからロシアが詫げるべき側である、と

いうことになる。もっとも、先に手を出す、つまり先制攻撃といえば、世界大戦後、21世紀に入っても先例がたくさんある。特にイスラエルによる先制攻撃を私たちは何度も目撃してきた。イラクに英米軍が突如攻撃開始したのも大規模な先制攻撃だったし、アフガニスタンもそうだった。ところが、これらの先に手を出した側は叱られないままである。罰せられもしない。

ロシアにはロシアの理由があるらしい。ただの子どもの喧嘩ではないのだから、複雑な背景があるのは想像できるし、兵器を使つての喧嘩はちょっとした怪我ではすまされない。ロシアによる“特殊軍事作戦”などという愚かな決断、地獄への道をあえて選んだのはなぜか、熱り立つ前に、即対決姿勢になる前に、その深い理由をもう少し検証してみても良さそうに思うが、そうはならない。それに、悲劇が拡大しないように、だれかが言い聞かせなければならない。手をこまねいていてはいけない。しかしこれもまた複雑。当事国間の話し合いの場を設け、それを仕切るルールも必要だが、ルールはあつてなきが如し。力が正義だからだ。仕切るべき力を持つ大きな国の代表たちは、いくさが終わることを真面目に考えていない。むしろ、いくさで結果を出さなくてはならないと、背後から武器支援を続けるし、当事者ウクライナももっと武器支援しろと西側諸国に訴える。ロシアもどんどん領土欲を剥き出しにして、砲爆撃をやめない。兵士たちは狂って残酷ないくさにのめり込んでいく。凶暴化は必然。普通の生活をしていた市民は突然の恐怖で逃げ惑うしかない。ウクライナの市民と兵士たちの屍が増えていき、ロシアの兵士たちの屍も随分と増えてしまった。血も凍る、おぞましい光景である。同時に、東部ウクライナとの国境沿いのロシア側にも「敵」からの砲爆撃で被害は出ているし、避難民も発生し、恐怖に怯える日々を送っている人たちがいることは、ほとんど報道されていないが、忘れてはいけない。(註1)

戦争は絶対やってはいけないと子どもたちに説いたロダーリの詩の静かな叫びが、また聞こえてくる。大きな間違いを犯し続けるのはもうやめろ、と。しかし、現実には武器産業や死の商人たち、それで国を富ませられると喜ぶ政治家たちは、もっと続けろ、もっとやれ、と胸の内で願っているのだろう。できればこの際、現体制を潰してしまえという傲慢な青写真もあるのかもしれない。

気になるダブルスタンダードと善悪二元論

おまけに、領土的野心という魔物は、地上から消えることがない。とにもかくにも人類が力を合わせて平和な秩序をもたらし、営々と努力して築いてきた世界の秩序はこれほど不完全なものだった。

ロシアによる一方的な軍事侵攻が非難されるべきであるということは言うまでもない、論をまたない、とはウクライナ危機を論じる際に不可欠の枕詞であり、大前提のルール。まるで踏み絵のようでさえある。国連安保理の常任理事国として率先して国際秩序を守るべき立場なのであるから尚更であるとも。しかし、ゼレンスキー政権やバイデン米政権の対応も問題だという指摘をするときは用心しないとイケない。ウクライナは善、ゼレンスキーは英雄、ロシアは悪、プーチンは悪魔、と信じる人から叱られ、呪われさえしてしまうから。

「ウクライナの戦争をやめよーロシアの軍隊は撤退せよ、NATO の拡大にはノーを。」
(Stop the War in Ukraine: Russian Troops Out, No to NATO Expansion.)

このスローガンを侵攻直後から掲げたのはコードピンク (CODEPINK) という団体である。平和と社会正義のために、国際的な連帯運動を展開してきた主として女性たちで構成される団体である。発したそのスローガンは「ロシアは侵攻をやめよ」だけではない。「NATO の拡大にはノーを」と言うところが重要だ。しかし、「ロシア悪、ウクライナ善」という図式の下であつという間にこの世界はひとつにされていった。善と悪の二元論ほど、不毛なことはないと考える者にとって、異論は許さないという空気は苦しい。それはまるで濁流であり激流であった。

2月24日から一週間以上経つと、私はメディア報道をシャットアウトせずにはいられず、しばらく目も耳も塞いでしまった。命を奪い合う悲惨な状況を見る勇気がなかったからだけではない。隣国へと逃亡するウクライナの人々の姿を見るのが耐えられなかったからだけではない。強い既視感があったからである。ダブルスタンダード (二重基準) を見せられる不快感を伴っていたからである。

それはまた、あまりに鮮明な一方通行のショーだった。来る日も来る日もそれが繰り返された。目を転じてみれば、昨年8月に米軍が去った後のアフガニスタンの人々の苦難は経済制裁でさらに過酷さを増し、集団飢餓に陥っている。シリア難民の逃避行、ひもじいキャンプ暮らし、破壊し尽くされた惨憺たる市街地と荒廃したシリアの国土。イラク戦争とその前の湾岸戦争で生じたおびただしい数の戦争犠牲者。75年前の国連決議で国を失ったと言ってもよいパレスチナ難民と彼らに襲いかかった今日までの数えられない悲劇。イスラエルのアパルトヘイト体制の下で生きる西岸とガザのパレスチナ人たち。モロッコの占領下で蜂起して壊滅させられても、また隣国の環境の厳しい砂漠の難民キャンプにあっても我慢強く懸命に生きる西サハラの人々、そして、米国の兵器を使ったサウジアラビアの軍事介入で長く激しい戦闘が続くイエメンの惨状と飢餓…まだ書ききれないほどある。幸福な日常を奪われ見捨てられた人々だ。そうした写真や映像シーンが次々に浮かんでくる。現在のウクライナの惨状と重なるように。しかし残酷な違いは、そうした中東の人たちに対する西側諸国の冷淡な対応である。そして日本も含めての眼差しの冷たさも。国連

には期待できることもない。

ロシアに対する経済制裁が発動されたときに即座に思いを馳せざるを得なかったのは例えばイスラエルとパレスチナのことであった。虐殺と見られる惨殺遺体が発見された“ブチャ”は、40 年前にベイルート近郊で起きたサブラ・シャティーラ難民キャンプにおける大虐殺を思い起こさせた。世界の注目度は多分段違いだろう。そこにあるダブルスタンダード（二重基準）を見せつけられる。パレスチナ人たちは、もう 75 年も前から大規模に民族浄化のターゲットにされてきた。どんなに声をあげて叫んでも世界は、特に欧米列強諸国はまともに聞こうとしなかったし、助けてこなかった。それどころかテロリスト扱いであった。どれだけ国際社会から非難される残虐行為をイスラエルがやったとしても、“ヨーロッパ人”や日本人にとって攻撃者である彼らはどこまでも守られるべき人々であり、ホロコースト犠牲者なのである。よって、イスラエルに対する経済制裁は行われてこなかったのに対して、パレスチナの人々が起こした対イスラエル制裁を求める BDS 運動（イスラエル製品へのボイコット B、投資撤収 D、経済制裁 S）は冷たくあしらわれてきたのである。BDS 運動は違法であると決めつけて運動を潰そうとしてきた米国とイスラエルとそれに同調する国々のほとんどが、対ロシア制裁については完璧に歩調を合わせる。とはいえ、今はパレスチナに連帯する BDS 運動も負けてはいない。BDS 運動への支持は北米でも、そして特にアイルランドや英国でもめざましく広がりつつある。イスラエルとの経済関係が密接になりつつある日本でも。さらに見落とせないアフガニスタンやイランに課されている経済制裁にまつわる二重基準もまた、西側の欺瞞性を示している。（補足 1）

ロシアの国連安保理事会の拒否権問題も取り沙汰されてきた。しかし飾らずに言えば、これもよく言えたものだと思う。数々のイスラエルの戦争犯罪を「戦争犯罪」と断罪し制裁を加える決議に常に拒否権を行使してきたのは米国である。ロシアが国連安保理事の常任理事国として今回拒否権を行使したのと大した違いはないと指摘するのは間違っているだろうか。ロシアの場合は、自国の犯罪に拒否権を行使するというこれまでにない例ではあるが。

あるパレスチナ系米国人の学者は、3 月 4 日、侵攻開始の 1 週間後にこう書いていた。「パレスチナ人として、砲撃、破壊、難民の光景に自然に同情と共感を寄せられるが、ロシアのウクライナ侵攻に対する国際的な反応は、私たちにとって全く異質なものであった。一夜にして、国際法が再び重要視されるようになった。武力で領土を奪ってはならないという考え方は、突然、守るべき国際規範となった。」（註 2）この学者にとっては耐えがたい驚きだったのである。国際法遵守が強く訴えられていることに違和感を覚えるという痛烈な感想。パレスチナ人たちにはこれまでまともに国際法は適用されたことがなかった。ウクライナ人を被害者として適用される国際法がどうしてパレスチナ人に適用されないの

かと抑えきれない疑問と嫉妬と怒りが出てきても不思議はない。

表現の自由と「戦いたくない」自由と

ロシアの軍事侵攻から2カ月半が過ぎようとする5月11日、パレスチナではアルジャジーラ・テレビの女性ジャーナリストであるシリーン・アブー・アクレ記者が殺害されて騒然となった。彼女はイスラエルによる西岸のジェニン襲撃の取材中に、イスラエルの狙撃兵によってあっけなく命を奪われた。アラブ世界でこのパレスチナ系米国人記者を知らない人はいなかった。勇敢で献身的なジャーナリストだった。広く愛された彼女はイスラエルにとってよほど目障りだったのだろう。今年没後50年となるパレスチナ人が誇る偉大な作家ガッサン・カナファーニを思い起こした人もいただろう。これまで特に秀でたパレスチナ人作家、ジャーナリスト、外交官、政治家、アーティストらが暗殺されてきたことも忘れることはできない。

エルサレム市内での葬儀の際、弔問のジャーナリスト仲間たちが彼女の棺を担いで進みだした時、集まった大勢の追悼市民たちの中に突撃するようにイスラエル警察が棺を担ぐ人たちを襲撃し、市民を殴り、大きく響く催涙弾を爆発させた。棺は危うく落下しそうになった。その醜い場面を、配信ネット動画で見た世界中の人たちは嘆き、怒った。そして祈った。

シリーン記者の死をきっかけに、パレスチナ人ジャーナリストが多数殺害されてきたこともクローズアップされた。21世紀に入ってから50人以上のパレスチナ人記者が殺害されていたのである。これは戦争犯罪。だが、欧米諸国はこれを黙殺してきた。米国市民であるアルジャジーラ記者が殺害されても、米国は強くイスラエルに抗議せず、殺害の現場調査にも及び腰であった。デモクラシーを誇りにし、人権外交の国として歩んできた国であるはずなのに。

ゼレンスキー大統領は、敢然とロシア軍に抵抗する戦時の「英雄」になっているが、「カッコいい」振舞いで正義を振りかざして武器支援を訴える姿はファシズムのリーダーに私には見える。戦時体制を率いる指導者としてはなかなかのものだと思う。しかし、Tシャツ姿の大統領の現地報告や会見は、臨場感にあふれ、練りに練られた総合的演出臭もする。

それにしてもゼレンスキーという人間の「アイデンティティ複合」はどうなっているのだろうか、不思議でならない。もともとロシア語話者としてロシアの演劇界で活躍した、話し上手で議論上手なコメディアン・俳優出身の大統領らしく、いまでも巧みに大統領を演じている。ユダヤ人（ユダヤ教徒）という出自で、ウクライナの極右ネオナチによるユダ

ヤ人大量虐殺の犠牲になった親戚も多数あると伝えられる。大統領に就任直後はミンスク合意など、ウクライナ東部の問題をロシアとの話し合いで解決する姿勢を示していた彼も、欧米重視へと変わっていった。開戦後、彼はイスラエルからの軍事支援を求め続けていたが、ロシア制裁には加わらず、ウクライナへの軍事支援も行わないイスラエルに苛立つ一方、「大イスラエル」はウクライナが戦後に目指すモデルであると公言し、イスラエルを賞賛してきた。彼は「今、パレスチナ人が無残に殺されている事態には目もくれず、ウクライナを救えとだけ叫ぶ」偽善の人なのである。（註3）そして、米国からの軍事支援を受け、ウクライナの男たちを戦場へと送り出し徹底抗戦を続ける彼は、ウクライナ国民の「戦いたくない自由」を奪っている。国民総動員令を出して18～60歳男子の出国を禁じ、民間人に召集令状を出して徴兵を始めたのはこのウクライナの大統領である。（註4）

その上、同じく18～60歳の特殊任務従事者以外の全女性の軍事登録制度（妊婦・乳幼児をもつ者も含め）が昨年10月にウクライナ国防省令として発表され、12月には（徴兵制ではないとその後発表されたが、）正式に兵役登録義務が公布された。逃れたら罰金を科せられるというものであった。ウクライナは昨年からすでに臨戦態勢準備中であったことがうかがわれる。（註5）

夢みる夢を持つ

ウクライナとロシアが敵と味方に分かれて苦しむ人々の中に、どちらにも親戚や友人がいる人たちがいる。敵と味方になんかそもそもなりたくない。いっそ国境がなければ良いと思っている人たちであろう。

詩人谷川俊太郎の『へいわとせんそう』という絵本の最後に「あかちゃん」が左右のページに一人ずつ寝ころんでいる絵がある。どこにも変わりがない二人のあかちゃん。そして見開きの左には「みかたのあかちゃん」、右に「てきのあかちゃん」という文字がある。あかちゃんを敵と味方に分けることなどできるのかと問いかけているのだ。

詩人ジャンニ・ロダーリは『空はみんなのもの』と題する詩の終わり二行で問いかける。「どうして空はまるごとひとつなのに、地上は境界線だらけなの？」と。本当は国境などない方がよい。人と人が自由に交流できる、そして友情を育むことができる風通しのよい地上にならないものだろうか、という「夢みる夢をもつ」のである。

聞こえてこないだろうか？「想像してごらん。天国も地獄もなく、頭の上はただ空が

広がっているだけ。・・想像してごらん、国なんてものはないと。殺す理由も死ぬ理由もない。・・私のことを夢想家だと君は言うかもしれない。けれども・・」そう、ジョン・レノンの「イマジン」の歌。ロダーリと同じことを詩にして美しいメロディーに乗せてくれて、世界中から愛される永遠の大いなる祈りの歌になった。ロダーリとレノンはこんなに近いところにいる。

〈註 1〉 Liza Rozovsky, "For Russian Villages on the Border, Ukrainian Bombings Are Constant", Haaretz, June 12, 2022

〈註 2〉 <https://www.thenation.com/.../ukraine-palestine-occupation/>
筆者ユースフ・ムナイヤル（パレスチナ系米国人学者、ワシントン D.C のアラブセンター研究員）はこうも書く。「国際法が、強国がそれを行行使するのに都合のよいときだけ施行され、強国がそれを無視するのに都合のよいときは無視されるなら、国際法は権力の道具としてしか存在しないことになる。」Yousef Munayyer "On Watching Ukraine Through Palestinian Eyes", *The Nation*, March 4, 2022

〈註 3〉板垣雄三「人類社会にとっての短慮と遠慮：問われる日本の未来図」レジュメより。日中国交回復 50 周年記念 武者小路公秀・加々美光行教授追悼国際シンポジウム、2022 年 9 月 25 日

〈註 4〉「国民総動員令を出して 18～60 歳男子の出国を禁じ、民間人に召集令状を出して徴兵を始めた。国外からも義勇兵を集め、極右武装勢力にも武器を渡す。野党の活動を禁止し、親露派の政治指導者の身柄を拘束した。戦争を遂行する大勢翼賛体制を作り上げたのだ。」鮫島浩「日本共産党とウクライナ侵攻」『サンデー毎日』2022 年 6 月 19 日・26 号

〈註 5〉2021 年 12 月 27 日付けの Kyiv Post (Ukraine's Global Voice)紙に掲載された"Women to register with Military or Face Fines"の記事にある。軍事登録は徴兵制ではなく、2022 年中は何の問題もないだろうし、この法改正が女性の日常生活に影響を与えることはないという衝撃を和らげる配慮の見られる書き方となっている。
<https://www.kyivpost.com/ukraine-politics/women-to-register-with-military-or-face-fines.html>

また、2021 年 12 月 25 日付けの The Kyiv 紙の記事"Explained: New requirement for Ukrainian women to register for possible military, civil defense service"には、18～60 歳の

全女性人口の 90%の、雇用と年齢の条件に合う女性は、2022 年末までに登録する義務があるとあり、1 年かけて軍事登録事務を完了する予定が組まれていたことがわかる。「これを怠ると 180~300 ドルの罰金か、最長で 1 年間の社会奉仕活動が課される。訓練を避けた場合の罰はより厳しく、300~435 ドルの罰金と最大 2 年間の社会奉仕活動が課される」との警告があるのもわかる。しかし、この法改正が波紋を呼んでいることに配慮し、本格的なロシアの侵攻があった場合でも、軍への参加を申し出ることができるだけで、強制されることはないし、戦闘に参加するわけではないと説明している。

<https://kyivindependent.com/national/explained-new-requirement-for-ukrainian-women-to-register-for-possible-military-service>

〈補足 1〉アフガニスタンに対する経済制裁しかり、イランへの経済制裁しかり。凍結されたアフガニスタンの中央銀行の 35 億ドル資産はスイスの信託基金に預けると発表したバイデン米政権による実行が待たれる。イランの経済制裁もまたイランの人々に過酷な状況を強いているとして問題視する声が高まっている。オバマ政権末期にイラン核合意 (JCPOA) が成立したが、トランプ政権がご破産にして以降、イランへの経済制裁が続いてきた。今年 9 月に入って、テヘランで 22 歳のジナ・マフサ・アミニさんがヒジャブの被り方が服装規定に違反したと咎められ、「道徳警察」によって拘留され暴行を受け死亡したとわかり、それをきっかけにまず女性たちが街頭に出て抗議運動を展開し、テヘランやクルディスタン州他で広がったこの動きと経済制裁は無関係ではないという見方に注目すべきだろう。強制的な「ヒジャブ法」の撤廃だけでなく、基本的権利の回復を民衆、とりわけ女性たちが求めていることが示される抗議運動ではあるが、これを利用して、イラン核合意への復帰が妨害される可能性もある。食糧と医薬品という必需品の不足に特に苦しんできたイラン人の生活を困難にしている制裁を解除するよう米国政府が方針転換を図ることとイラン核合意への復帰実現は不可分に結びついている。平和を促進するためにも不可欠であるとする見解である。

https://www.codepink.org/mahsa?recruiter_id=981096&fbclid=IwAR0yP2n3cq-HYbAtaUPDPP80zgsPIZ0QaceucIWZ9RJooxzP-dPjKfDOMMk

〈補足 2〉9 月 15 日には、ゲリー・コンドンという米国退役軍人で「平和のための退役軍人会」の元会長である人物が、バイデン大統領に宛てて、ウクライナ戦争を終わらせるために外交的手段ですぐに対応してほしいと訴える書簡を送ったことを「ポピュラー・レジスタンス」というネットニュースサイトで全文を公表した。「もうやめてほしいー戦争で解決はしない」という題名記事である。この戦争がいかに西側の言論封圧によって人々が単純な親ウクライナ、反ロシア感情へと導かれてきたかを明らかにしていると同時に、世論の反発を恐れずにウクライナへの米国の“汚い”コミットを暴露している。

<https://popularresistance.org/letter-to-president-biden-enough-is-enough-war-is-not-the-answer/?fbclid=IwAR0yP2n3cq-HYbAtaUPDPP80zgsPIZ0QaceucIWZ9RJooxzP-dPjKfDOMMk>

コンドン氏は「ナチス」という言葉をウクライナの特定期軍事勢力のことを言うときに反発を恐れず躊躇なく使っている。しかし、西側の政治家たちもメディアもそのような（ナチス）勢力は存在しないことは自明であるかのように、それを前提にして論じてきた。ウクライナ側とそれを支持する西側陣営の正当性を謳い、ロシアの国際法違反と残忍さのみを指弾してきた。しかし、2014 年からずっとゲリー・コンドン氏はロシアによる侵攻の可能性を語り、警戒してきた注意深いウォッチャーである。2014 年以降にウクライナの民兵（軍事勢力）がウクライナ東部諸州のロシア語話者たちに対して実際に起こした残虐な諸行為についても今年の 2 月以降、西側は沈黙してきたが、彼はウクライナ軍に編入されることになったアゾフ大隊の歴史と性格に目を背けずに書く。ロシアとの国境にこのような敵対的な「軍隊」が配置されていたと書くコンドン氏は、「私たちは、あなた（バイデン大統領）がロシアの正当な懸念を軽率に無視したことに不信感を覚えました」と大統領を批判し、ウクライナを（ハイテク兵器を含めて）武装させたのは米国だとも断言する。そして最後に「これ以上の惨事を避けるために・・・今すぐ軌道修正しなければなりません。武器を捨て、外交を受け入れてください」と訴えている。

***このエッセイは、『詩人会議』2022 年 8 月号掲載された原稿（6 月半に書いたもの）を基にして、僅かな表現の変更と若干の加筆・補足をしたものです。**